

2022年6月1日(水)～2日(木)

旧東海道ブラ歩き(19)草津宿—京都三条大橋

日本橋から歩き始めて1年半、33日目にして遂に京都三条大橋に辿り着いた。長いような短いような旧東海道ブラ歩きであった。初日の歩行距離は草津から大津まで17km強、2日目は大津から京都三条大橋まで12kmで合計30km弱、歩数はそれぞれ38976歩と32793歩で合計71769歩。日本橋から数えると合計502.3km、115万歩である。今回時間的に若干の余裕があったために、石山寺と三井寺という2カ所の名刹見学のために初めて一時的に旧東海道を外れたが、これは十分に報われた。また、最後と言うことでホテルも琵琶湖ホテルと都ホテルと贅沢をしたが、お陰で歩き終えたあとの疲れがそれほどでもなく済んだ。

今回のハイライトは初日は石山寺と琵琶湖、2日目は義仲寺(ぎちゅうじ)と三井寺である。このうちでも特に印象が強かったのは芭蕉の墓のある義仲寺である。

前回と異なり今回は旅をしている人との交流がなかった。京都から江戸に向かうらしい人は何人か見かけたがこの人たちは旅を始めたばかりであり、まだ他人の経験には興味が無いのかも知れない。我々も都内を歩いているときに反対方面から来る人には声をかけなかった。とはいえホテル、レストラン、喫茶店等など店の人と話すときに自発的に或いは先方の問いに答えて東京から歩いてきたという、ほとんど全員が鳩が豆鉄砲を食らったような顔をするのが面白かった。矢張り京都まで歩いていく人の数はその他手段で来る人に比べると圧倒的に少ないのだろう。

途中我々兩人とも怪我もせず無事京都に辿り着いたことを素直に喜んでる次第である。

なお、旧東海道ブラ歩きの旅は三条大橋で終了するので、それ以降については公式の記録には含めない。しかし折角京都に辿り着いたのでそのままとんぼ返りをするのも惜しいので京都に2泊してゆったりとした時を過ごした。この点は末尾に番外編として短く触れている。

Day 1、 草津宿—大津宿 6月1日(水) 晴

5時前に起きて品川発6時7分の新幹線のぞみに乗る。京都経由で草津に着き9時前に歩行開始。前回は家内の腰と膝の痛みのため途中から旧東海道を離れて国道1号線で草津にたどり着いた経緯があるので、今回はこの分をカバーすべく草津駅から中山道を短区間歩

いて9時10分に旧東海道との合流点に到着。これ以降はこれまで通り旧東海道（ここから京都までは旧東海道と中山道は同じ道）を歩く。

9時17分草津本陣に差し掛かる。ここは旧東海道で現存する本陣の中で最大級の規模（建坪468坪、部屋数30余室）を誇るだけあって立派なものであった（写真1）。宿帳には各藩の藩主や新選組の有名人の名前が見える。なお、当然とはいえおもしろかったのは殿様と家来では部屋だけではなく風呂から雪隠までまるで違う点である。また、このすぐ近くの草津宿交流館での説明によると、徳川家への降嫁で皇女和宮が中山道経由で江戸に向かった際にはお供の人数が余りにも多かった為、草津宿通過に4日もかかったそうである（インターネットで調べると人数は3万人、行列の長さ50kmとある）。なお交流館にはこの時和宮に供した食事が展示されていた。暫しの間、幕府との取引の道具とされ、望まない結婚を強いられ、若くして尼になった和宮の事を想う。

ここで40分ほど過ごしたのち大津に向けて歩き出す。草津も宿場町のところは昔の面影が残っているがここを外れて南草津になるとなんの変哲もない狭い道をひたすら歩くこととなる。11時に弁天池、11時45分に月輪一里塚を通過、三条大橋まで五厘余りとの表示がある。瀬田の唐橋の手前にうなぎ料亭山重（室町時代創業の老舗）があり、12時半をまわっていたので昼食に入る。宮宿で蓬萊軒の美味しいひつまぶしを食べた身には物足りない。

13時25分いよいよ琵琶湖にかかる瀬田唐橋に差し掛かる。旧東海道はここから北に向かうが、地図を見るとほんの少し南に外れたところに有名な石山寺がある。時間的にも余裕があるので思いきってこちらに向かう。

瀬田唐橋を渡ったところに京阪本線一石田線の唐橋前駅があり、ここから一駅南に石山寺駅があるのでここまでは電車、ここから800mほど歩いて14時に東大門（重文）に至る。ここから境内に入って国宝の本堂を目指す。これが結構な上り坂で本堂前の石段はまさに急勾配である。本堂からの緑の眺めは格別で、桜の頃はさぞ美しいと想像される。石山寺は1260年以上も前の天平19年の聖武天皇の勅願によって開基された寺で本堂の他にも多宝塔などの国宝や重要文化財が多数あったが、時間の関係でゆっくり見られなかったのは残念な次第であった。

石山寺はもう一つ、紫式部が八月十五夜の名月が琵琶湖に映えるのを見て構想を得て源氏物語を書き始めたとの伝承がある。本堂の一室に紫式部が執筆したとされる源氏の間があり、そこには源氏物語を執筆中の紫式部の座像が置かれている（写真2）。偶々本堂よりさらに高所にある豊浄殿では瀬戸内寂聴さん追悼の「源氏物語と女君」と題する特別展が開催

中でこれは大変興味深い展示であった。石山寺は枕草子、和泉式部日記、蜻蛉日記にも登場するそうで当時の文化の中心地の一つであったことが窺われる。ここを訪れたのは成功だった。

他方、急勾配の長い石段の登り下りと、ここに立ち寄ったことによる 2km 以上の追加歩行で家内はだいぶ足をやられ、その後の歩行に影響するという代償を払ったのも事実である。

行きと同じ経路で再び唐橋前駅に戻り、旧東海道に復帰したのが 15 時半であった。16 時 20 分膳所(ぜぜ)を歩いているときに亀屋廣房というおいしそうな和菓子屋さんがあった（実は有名な京都の亀末広の別家）のでここで 15 分休憩の後、17 時 23 分に芭蕉の墓がある義仲寺に着いたが既に閉門して見られなかった。期待していただけに大変残念だったので、翌日朝一番で再訪のこととした。この辺りの旧東海道は琵琶湖沿いではなかったが、翌日再度ここを歩くこととし、以後は琵琶湖の湖畔に沿った景色の良い道を進む。途中琵琶湖の湖畔にあるコンサートホールを見たが実に立派なもので、近く前橋汀子の演奏会があるようだ。この辺りで家内の足が重くなり出したが、最後の力を振り絞って 18 時に大津駅に近く琵琶湖に面した琵琶湖ホテルにチェックイン。予約の際、東海道五十三次を歩いている途中と言っておいたが、驚いたことにフロントの全員がこのことを承知しており、我々の年齢を告げると皆から驚かれるとともに感心された。部屋は琵琶湖を正面に見据え、西には比叡山も見える良い部屋（写真 3）、大浴場もあり、ディナーも大変美味しい（これまでのうちで宮宿の蓬莱軒と並んでベスト）。従業員の接客の良さと相俟って我々の疲れも吹き飛んだ。

Day 2、 大津宿－京都三条大橋 6月2日（木）晴

上述の通り昨夕義仲寺に立ち寄ったものの時間が遅くて見学出来なかった。しかし此処には芭蕉の墓があるので見落とせない。こう考えて朝 8 時 45 分にタクシーを頼み 9 時の開門と同時に一番乗りで見学を開始した。ここは元々 1184 年に源範頼・義経の軍に敗れて 31 歳で討死をした木曾義仲を祀った寺だが、1694 年に芭蕉が大坂で客死した際の遺言で芭蕉の弟子たちが師の遺骸をここまで運び義仲の墓の隣に埋葬した寺でもある（写真 4）。この関係でここは俳句の聖地で弟子の句碑も多数ある。有名なのは又玄(ゆうげん)の「木曾殿と背中合わせの寒さかな」がある。この他義仲の側室巴御前の塚もあった。この他硬派の文人保田與重郎の墓もあり一寸驚いて調べてみたが、この人は義仲寺の再建に貢献した人だったようだ。

芭蕉の句碑は二つあった。その一つは辞世の句である「旅に病んで夢は枯野を駆け巡る」、もう一つは「古池や蛙飛び込む水の音」である。この寺には若沖の天井画もある。全体に入手したパンフレットの内容が分かりやすく、係の人も親切で、充実且つ文化の香りの高い時間を過ごせた。

30分ほどでここを辞し、膳所（ぜぜ）駅まで歩き、京阪の坂本―石山線で三井寺駅まで行き、琵琶湖の疏水沿いに歩いて三井寺に向かう。ここは旧東海道からは少しはずれているが、この日は時間的にも余裕があり、また、是非見たかった場所なので前日の石山寺に続いて2度目の寄り道をした。三井寺は7世紀後半の壬申の乱の大津京時代創建の古い寺で源平の乱、南北朝の争乱による焼失に耐え現在に至っている。見所満載だが時間を30分と決め、国宝の金堂（写真5）と重文の三井の鐘楼に絞って見学した。流石に全国に聞こえる寺だけあって、立派な寺である。ここも桜の頃は大層美しいようだ。ただ鐘楼の鐘を1回つくのに800円かかる商業主義にはややガッカリした。見学を済ませた後は慌てて京阪電車でホテルに戻り、11時20分にチェックアウトした。ホテルでは我々が日本橋から歩いてきたことで従業員の間でちょっとした有名人になっており、出発の折にはフロントの男性2人が外まで出てきて、激励を受けた。

11時26分に旧東海道に戻って歩き始め、すぐに警備の巡査がロシア皇太子を刺した大津事件の現場付近を通り過ぎる。その後昔の面影のある大津宿の街並み（写真6）を外れ国道1号線に沿って逢坂の峠を登り、12時16分に逢坂山関跡に到着。この坂はトラックがビュンビュン飛ばすそばを特段の見所もなくひたすら登るだけで結構きつかった。ここは京阪電鉄も走っているが、電車は急勾配のところはちゃっかりトンネルに入ってしまう。こちらはトンネル無しだ。峠の頂上に鰻屋があってここからは下りだ。12時56分に伏見追分に至る。ここは東海道と伏見街道の分岐点である。この手前から国道1号線と別れ、再び狭い旧東海道を歩く。13時24分滋賀県から京都府（山科）に入る。この辺りで通りがかりの蕎麦屋で遅い昼食をとる。

15時、最後の登りである日の岡峠にさしかかる。ここは道幅が狭くそのぶん坂が急に見える。予期していなかったため結構こたえた。家内は逢坂の登り以降杖が離せない。小生もこの辺りから重心が左に傾きだしたと家内から注意を受ける。自分でも若干疲れ気味の自覚がある。

15時24分、漸く日の岡峠を越え、三条通に合流する。あとは下りである。愈々ゴールが近づく。15時34分栗田の刑場跡。15時53分都ホテル前を通過、この辺でちょっと疲れたので喫茶店で25分ばかり休み、16時45分、遂にゴールである三条大橋に到着し、通りかかった若い女性に2人並んで記念写真を撮って貰う（写真7）。一年半かけて漸くゴ

ルした達成感と、これで終わってしまったという一抹の淋しさを残す幕切れであった。そこから地下鉄で都ホテルにチェックインし、部屋から見える南禅寺と東山の景色を満喫（写真8）、気持ちの良い大浴場の温泉で疲れを癒やし、ここに2泊して帰京した。

経費は交通費 40260 円、宿泊費 37200 円、食費 17600 円、その他約 5140 円、合計 100200 円、日本橋からの合計は 77 万円であった。京都での番外滞在では気が緩んだので少し贅沢なホテルに泊まり、これを加えると 93 万円である。



写真1 草津本陣内部



写真2 石山寺本堂の紫式部像



写真3 琵琶湖ホテル部屋からの眺め



写真4 義仲寺 芭蕉の墓がある



写真5 三井寺金堂（国宝）



写真6 大津宿の街並み



写真7 三条大橋の上で 後方は鴨川



写真8 都ホテル 部屋からの東山の眺め 建物は南禅寺山門

番外編 京都での二日間

三条大橋到着でその日のうちに帰京も出来たが、折角なので二人とも大好きな京都でのんびりすることとした。幸いホテルには天然温泉の大浴場もあり二日間共に朝ゆっくり起きてすぐに温泉につかり、その後 10 時半近くまで景色を見ながら朝食を楽しみ、その後いくつかの場所を訪れ早めにホテルに帰ってから夕食を楽しんだ。

6月3日（金）東山周辺

午前中はコロナで人が少ないと思った清水寺に久しぶりに行く。修学旅行の生徒がいたが混みようはまあまあ。有名な舞台からの景色も堪能できた。そこからホテルに歩いて帰るがその途中栗田神社近くの「こかじ」で昼食。おばんざいの店でどれも大変おいしかった。一旦ホテルに戻りタクシーで法然院に行き、学生時代から長くお付き合いいただいた朝日新聞社社主の上野さんの墓にお参りをし、序でに谷崎潤一郎の墓にも立ち寄る。その後哲学の道をゆっくり散策し、南禅寺経由ホテルに戻る。ディナーはホテル近くのレザンというレストランに入ったが大変おいしかった。

6月4日（土）嵯峨野

蹴上から地下鉄東西線と嵐電に乗り継いで嵐山下車。土曜日でもあり結構観光客もいたが嵯峨野で少し奥に入ると人は少ない。先ず向かったのが目の前に小倉山が見える落柿舎（らくししゃ）でここは芭蕉の門人去来の遺跡で墓もある。この縁で芭蕉もここに3度滞在し嵯峨日記を著している。句碑や歌碑も多数ある。例えば芭蕉は「五月雨や色紙へぎたる壁の跡」、去来は「柿主や梢はちかきあらし山」、虚子は「凡そ天下に去来ほどの小さき墓に参りけり」、西行は「牡鹿なく小倉の山のすそ近みただ独りすむわが心かな」といった具合である。芭蕉の句は嵯峨日記の最後に記した句だそうである。文化の香りがあちこちに漂う。庵のあちこちに俳句の投稿箱があったが才能が無い我々は一句もひねり出せなかったのは致し方ないところである。

後ろ髪を引かれる気持ちでここを辞し、平家物語に登場する悲恋の尼寺祇王寺に向かう。平清盛に捨てられた祇王が母刀自、妹祇女と共に断髪して仏門に入ったと伝えられる場所である。こじんまりしているがとくに秋の庭は素晴らしいだろうと感じさせる。

計画では太秦の広隆寺で木造の弥勒菩薩半跏像を見るつもりだったがこれは次回廻しとし、嵐電と阪急で四条河原町に行き家内の希望で錦市場で買い物をする。ここは流石に混んでいる。その後地下鉄で京都駅に行き、17時33分の新幹線ひかりで帰京した。